



わかちあいプロジェクト

NEWS No 17

2001 NOVEMBER

難民の人たちが彼に捧げた詩
Gift of Japan
日本の宝

苦さと教養にあふれる青年は アフリカの人達から信頼を受け
賞田 困窮 苦しむと戦った
あなたが突然消えてしまい
私達にさらなる悲しみを残していった
さようなら 日本の宝よ

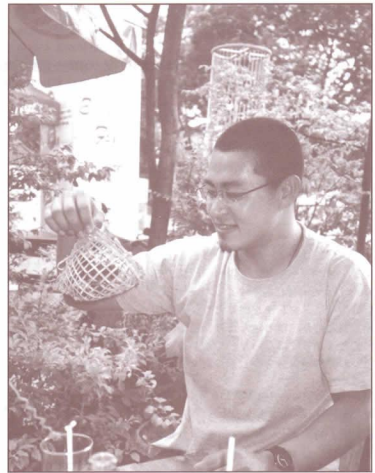
この贈り物は 私達から奪い去られた
目に見えない残虐な手によって あなたの力強さ
そして固い決意が 私達に教えてくれるはずだと
人類のために名譽をかけて生きると言うこと
さようなら 日本の宝よ

若者たちの原動力 日本製のエンジンのよう力強く
苦しむアフリカの子ども達の 問題を次々と打ちのめしてくれた
あの差もないエンジンの音が今も聞こえない
さようなら 日出づる国の宝よ

どうしたら私達は 日本まで旅し伝えることができるのか
このカクマの地から 重く深い悲しみの中で
ここにいられないはずと あなたを思い寂しくなる
さようなら 日出づる国の宝よ

日が昇っては西に沈むけど 今日日は沈むのが早過ぎる
でも日はまた昇るだろう アフリカの角に また日は昇る
さようなら 日本の宝よ

ろうそくの火が風に吹かれて消えてゆく
さようなら 日本の宝よ
さようなら 日出づる国の宝よ
さようなら ノリアキ・タカムラ



カクマにありては 5月25日タイ山岳民に贈られたスズメを散らす活動をつづけるタイの農夫

高村 憲明さん

わかちあいプロジェクトのカクマ難民キャンプ、プロジェクトマネジャーとして昨年8月から、難民たちに一番近い所で活動していた高村憲明さんが、自ら運転していた四輪駆動トラックの横転事故で7月7日に亡くなりました。

カクマから100キロあまり離れた隣町のロードで地域の中学生のサッカー大会に出場する道での事故でした。前日の金曜日は出場選手のためバスをつくって食べさせましたといいますが、彼は1997年春に、わかちあいプロジェクトの例会にはじめて出席し、8月から3ヶ月間、タンザニアのキボンド難民キャンプでボランティア活動に参加しました。1999年11月の福開国際マラソンに参加したエチオピア難民のアンボウ選手とのサポートを行い、当時無名であったエチオピアのアベラ選手（シドニーオリンピック優勝、世界陸上優勝）の2選手と一緒に大森

公園で練習するほどスポーツを愛する青年でした。
難民の若者に、私と同じようにチャンスを与えたい、私たちと同じように幸せであって欲しいとの願いを精一杯、実現していました。昨年8月、カクマに赴任したとき、なぜカクマで働きたいのかとの私の質問に、キボンドの難民キャンプで現地スタッフにいらしたことのお世話になったことに触れ、その親切に報いたいといったことを思い出します。高村さんのなかには、日本人の良さ、すばらしさを見出すには私だけではないと思います。控えめであるが、責任感とまじめさと溢れ、人をわけへだてせず、弱い立場の難民に期待し、自らすすんで喜んで奉仕しました。
難民の青年たちを、御視察の前で身ぶをつけて訓練してくれた語の通り、本当に「日本の宝」として私の心で生きたことを誇ります。（わかちあいプロジェクト代表 松木 隆）

コーヒー紅茶プロジェクト

2 チェンマイのコーヒーショップは タイ山岳民を支えています！



5月にオープンしたLanna Cafe



コーヒーチェリーを収穫する村の長老



コーヒーの花

恐るべしLanna cafeの常連客

村山 恵理 (派遣ボランティアスタッフ)

朝7時30分、Lanna cafeのシャッターを開け開店の準備を始める。コーヒーマシンのセット、店内の清掃、材料のチェック... 最後を外から店内を見渡し、大きな看板を見上げる「Lanna cafe」。愛着で胸が一杯になる瞬間である。

一からのスタートだった。マネージャーを選び、コーヒーの勉強をし、店舗を探し、メニューを考え、店内の改装、この9ヶ月たが死に時をすごした。その間、自分自身にジレンマを感じたり、人間関係で悩んだり、落ち込んだり、勿論楽しいことばかりではなかった。しかし、一つ一つの経験が自分を少しずつたくましくしてくれた。

Cafeにはたくさんの人が来る。タイ人、西洋人、日本人... 国籍も年齢も立場も多種多様。日本では決して出会う機会のないかたそいういた人々と言葉をお互いに、各々の価値観に触れる事は、自分を客観的に観察するうえでもとても貴重な体験である。なかでも、由一人各々の国での仕事から退き、「easy life」を求め第二の人生を返るためにタイへ来た人々の価値観は、私に大きな疑問を投げかけた。彼らは、各々の幸福論、人生観を長々と語り、最終的には「あくせくと努力するよりも、もっとリラックスして、人生を楽しむ。」という結論に至るのが常である。リラックス、人生を楽しむ、とはどういうことだろうと考える。ただおいしい物を食べたり、映画を観たり、お酒を飲ん

だりすることであろうか？ たぶん、私は違う。ストレスをためることもあるけれど、何か目的や目標を達成するために夢中になっているときの方がよっぽど充実感を感じる。少なくとも今の私にとって、「easy life」は「つまらない生活」であることは確かだ。

いろいろな生き方がある。特に日本人は自分の生き方を自分で選択できる特権をもっている。ここに来て、様々な価値観にふれ痛切に思ったことは、「人生、なんでもあり」ということ。こう生きなければいけない、という法則がない。ちょっとした勇気さえあれば、自分の人生の幅をくらべて広げることができる。学生をきこって休学してのタイでの社会勉強、この経験が私の人生の幅を広げるきっかけと勇気を与えてくれたことは確かである。

いつつ平気でただのブラックコーヒーを出していたなんて例もある。そんなこの国にもいいよ「カフェーム」が到来した感がある。ここチェンマイにも7月とうとうスターバックスが登場し、Lanna cafeの近所にも、コーヒーショップが軒並みオープンしている。

Lanna cafeの常連客も、はじめの頃こそ、圧倒的に地元外国人（日本人を含め）が多かったが、ここ最近はその割合も増えてきている。しかし、20パーセント（約52円）もあれば屋上で食事が取れるこの国の物価で、コーヒー1杯25パーセント中には60パーセントで出しているところもある。学生をきこって休学してのタイでの社会勉強」というのは、大部分の低所得階層にとってはまだまだ贅沢な飲み物である。

<マーケティング戦略>

ここチェンマイでは、タイの最大コーヒーメーカー「ボンカフェ」が幅を利かせている。高級ホテルやレストランにはすでにボンカフェが無料でコーヒーマシンを貸し与え、コーヒー豆を卸している。低予算の私たちにはとても太刀打ちできない。ではどうやってマーケットに打ち込んでいくか。浮かんでアイデアは、まだボンカフェの入り込んでいないコーヒーショップにコーヒーマシンを貸し与え、月払いでマシンを払い戻してもらうという、ボンカフェのスタイルをちょっと盗んだもの。それなら私たちには「フエイトレード」というタイではまだ新しいビジネススタイルが売り手になった。自家焙煎の新鮮さとフエイトレードというコンセプトが注目を受け、今では小規模ながらパンクほど外部からの問い合わせも徐々に来ている。

Lanna cafe プロジェクト —これまでの経過と将来の展望—

中島 佳織 (わかちあいプロジェクトスタッフ)

この国の人たちには、コーヒーを飲む文化が根付いていない。コーヒーと言ったら「ネスカフェ」、タイで出されるアイスコーヒーとしかたらず、気持ち悪くなるほどシロップが入っていて、コーヒー味の跡形もない。数少ないフレッシュコーヒーを飲める喫茶店でも、オーナー自身がコーヒーのことを無知で、エスプレッソやカプチーノといった名前はコーヒー豆の種類だと信じ込み、カプチーノとい